菅沼集落

Gokayama: A hamlet defined by its giant thatched roofs

巨大茅葺屋根の集落「五箇山」

富山県南砺市

特集　山のマチ、山のムラ
Special Features / Mountain Towns and Villages

八千代エンジニヤリング株式会社／技術管理本部／業務改革推進部
服部 晃大（会誌編集専門委員）
HATTORI Kodai

豪雪地帯の山中に立ち並ぶ巨大な屋根を持つ家屋

富山県南砺市に位置する五箇山は、岐阜県北部の飛騨高地を水源とし、富山県西部を流れる庄川の流域にある。この地は、険しく深い峡谷と1,000mを超える高清水山地の山々により、平野と隔絶された山村地域である。険しい地形と冬季の豪雪に加え、近年まで十分な交通網が整備されていなかったことから、かつては「秘境」と呼ばれていた。

集落には急な傾斜を持つ巨大な茅葺屋根が特徴の「合掌造り」と呼ばれる家屋が立ち並んでいる。その合掌造りの家屋群が織りなす貴重な農村景観と、そこに受け継がれる文化が評価され、同様の家屋が残る庄川上流の岐阜県白川村の白川郷とともに世界文化遺産にも登録されている。

このような厳しい自然環境の山中に、なぜ巨大な屋根の集落ができたのだろうか。

工夫が詰まった合掌造りの構造

五箇山には相倉集落、菅沼集落をはじめ、複数の合掌造りの家屋が現存している。これらの建物は江戸時代から明治にかけて建設されたものである。合掌造りとは日本の民家の建築様式の一つで、「棟」の両側に傾斜面を持つ山形の切妻屋根が、茅葺で大型であることが特徴である。この屋根の形状が手を合わせた「合掌」に似ていることが名の由来である。屋根は雪を落としやすくするため、約60°もの急勾配で、釘は一切使わず組み立てられている。軸部である1階の上に小屋組みの屋根を載せているだけの構造である。1階部分は専門職の大工が組み立て、2階以上の屋根の小屋組部分は村人たちが「ユイ（結い）」と呼ばれる互助の共同作業で材料の確保から加工、組み立て、葺き上げまでを行っている。一つの民家で明確に作業を分けていることも特徴となっている。不安定な屋根の補強のために「ハネガイ」と呼ばれる斜め方向の補助材が取りつけられていることや、雪の重みで片方だけが曲がった「チョウナ梁」を利用して、強度を確保しつつ、建物の空間を広くするための工夫がされている。

建物は2～4階建てで、1階に居間や土間などの居住スペースと、和紙作りなどの作業スペースが設けられていた。2階以上は養蚕のための蚕室として活用していた。蚕の飼育には採光が必要であり、窓を設けるために切妻型となったと考えられている。2階以上の床材は隙間が空いており、茅葺屋根の維持や蚕室の温度管理のために囲炉裏からの熱気や煙が家屋全体に広がるようになっている。茅葺屋根自体も、暑さ、寒さを一定に保つことに優れており、繊細な温度管理が求められる養蚕に適していた。

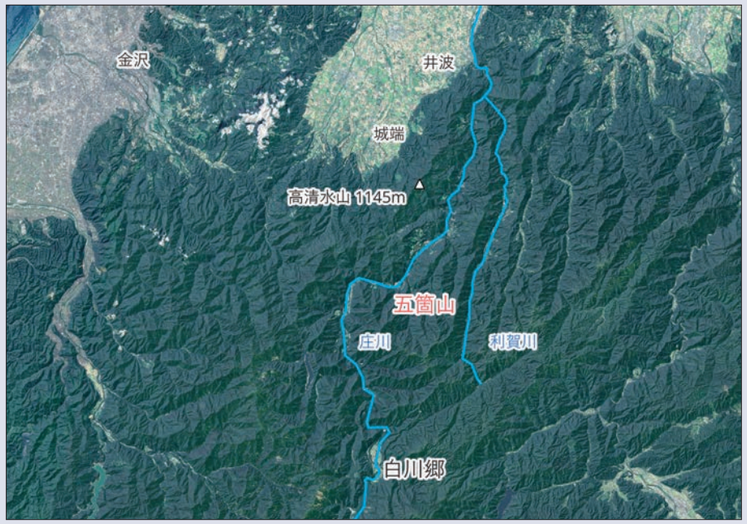

図1　五箇山とその周辺

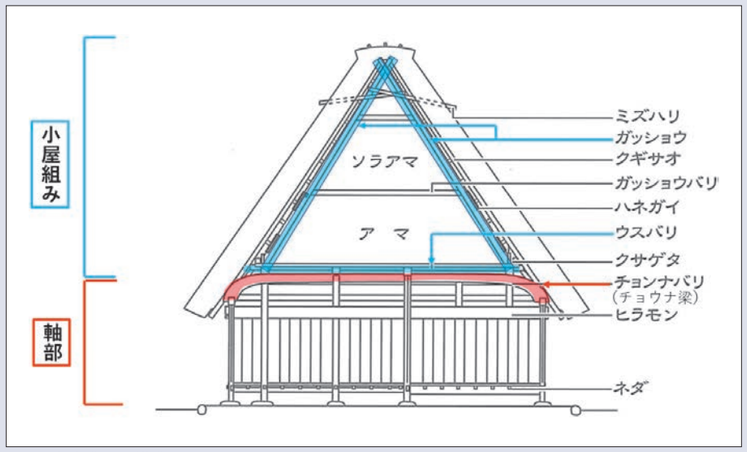

図2　合掌造りの構造

さらに、1階の床下は火薬の原料である「塩硝」の生産を行うスペースとなっていた。五箇山では囲炉裏の温かさを利用するために居間の床下に穴を掘り、土、蚕の糞や干し草などを交互に入れて5年ほど発酵させた培養土を灰汁と反応させる「培養法」という方法で生産した。この生産方法が行われたのは五箇山・白川郷の限られた地域だけであり、江戸時代には日本一の生産量と高品質を誇った。

これらの養蚕、和紙、塩硝は四季に応じて計画的に生産された。家屋の構造としても豪雪と平地の少ない立地において全ての生産を一つの建物で行うことのできる合掌造りは非常に合理的なものであったといえる。ではなぜ五箇山で養蚕、和紙、塩硝の生産が行われていたのであろうか。

商品生産で支えられた五箇山の経済

合掌造りを用いて養蚕、塩硝の製造が行われていた背景には、五箇山の立地、経済が関係している。冬には数mの豪雪となるような寒冷の気候、傾斜地が多い地形で稲作や畑作には適さない土地であった。そのため、これらの商品の生産によって暮らしが成立していた。

五箇山では江戸時代には米の代わりに金銀での年貢納付が加賀藩から求められていた。その金を得るための商品として生産されたのが養蚕、和紙、塩硝であった。養蚕で作られた生糸、和紙の換金は

麓の城端・井波の半方商人を通して行われ、その金を年貢として加賀藩へ納めた。そこでは換金だけではなく、資金の前貸しや商品掛け売りも行われ、五箇山の地域の経済と商品生産は城端・井波の有力商人が深く結びついていた。加賀藩の藩政改革「改作法」の中に「脇借禁止」という藩以外からの借金を禁止するものがあった。五箇山にも適用されたものの、後に特例として城端・井波商人からの借金が許されたようである。

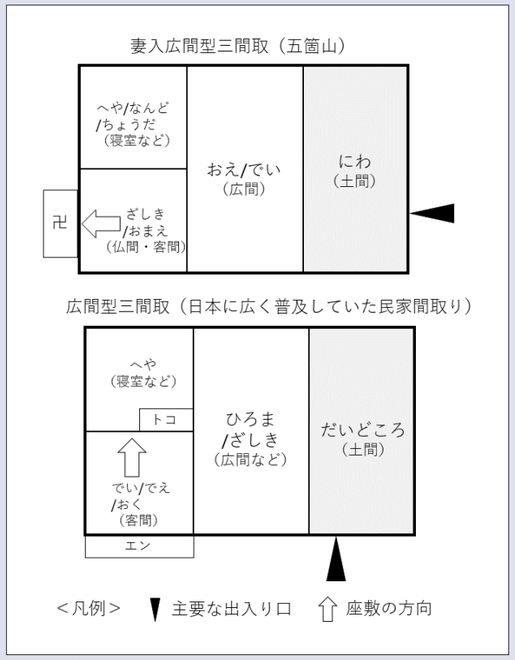

図3　五箇山合掌造りの間取り

写真1　五箇山の合掌造り（五箇山民俗館）

加賀藩の献上品として高品質な和紙、そして生糸は城端で絹織物として生産され、城端・井波の商人を通じて江戸や京都へ輸出されることで五箇山だけではなく周辺地域の経済も潤していた。一方で塩硝は火薬の原料であるため、加賀藩の軍事機密として生産・流通ルートは厳格に管理され、「塩硝の道」と呼ばれた飛騨街道などを通り、現在の石川県金沢市の金沢城周辺及び土清水にあった藩の火薬の製造工場・保管庫へ運ばれた。

このように五箇山は様々な商品の生産地として周辺地域と関わりながら、集落の経済は維持されてきたのであった。

五箇山から広まった合掌造り

五箇山と同様の切妻屋根の合掌造りは庄川流域の現在の岐阜県白川村から五箇山に至るまで広範囲に分布し、現在よりも多く存在していた。そして、その発祥は五箇山であると考えられており、特徴的な「合掌屋根」と「家屋」という異なるルーツを持った二つの要素が合わさってできたものである。

合掌造りの起源は年代を追うごとに大型化していったとする説や地域に根付いていた大家族制度の影響など諸説あるが、現存する合掌造りの建築部材の調査によって18世紀の50年ほどの短い間に合掌屋根へと変更されたことが判明している。建物の規模の大中小にかかわらず、一定の時期に合掌造りの屋根へと替えられたり、新築されているのである。

合掌造りの家屋の構造、間取りは各地域で差異が見られ、例えば家屋への入り方は五箇山の場合は妻側（短辺側）に入り口があり、白川郷は平側（長辺側）に入り口が多い傾向にある。五箇山の間取りは信仰されている浄土真宗の道場建築が影響していると考えられている。1471（文明3）年に蓮如上人によって北陸地方に浄土真宗の信仰が広まり、本願寺の勢力が大きくなった。五箇山・白川郷では戦国時代から近世初頭にかけて奥の仏壇とその前に大勢が入ることのできる部屋のある真宗道場が建設された。一向一揆の時代の道場は村の有力者である道場主の住居でもあったが、江戸時代になると、次第に住居としての性格を強め、屋根のみを葺き替えたり、解体して古材に転用されるなどして、かつての道場が持っていた規模や間取りが、そのまま民家形式として受け継がれた。結果、五箇山では「妻入広間型三間取」という妻側に入り口が存在し、入り口から見て奥に広間や仏間と仏壇がある間取りの民家となったと考えられている。

写真2　佐伯家住宅

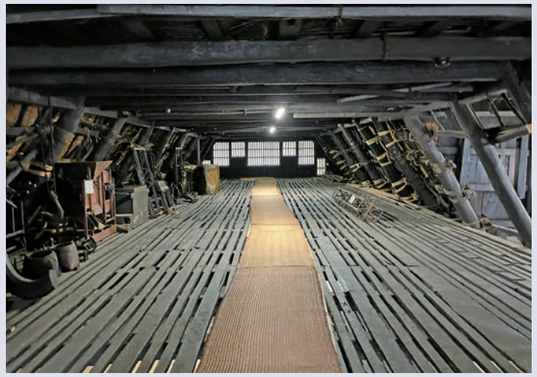

写真3　合掌造りの2階（岩瀬家）

合掌屋根への架け替え前の家屋は板葺きであったようであるが、合掌屋根となったのには五箇山・白川郷で盛んになった養蚕生産への注力が大きく影響している。五箇山・白川郷では17世紀末から18世紀初頭に養蚕が普及し、明治期に最盛期を迎えた。そのため、より広い養蚕のためのスペースが必要となったのである。富山県砺波地方の代表的茅葺屋根の民家の一つである佐伯家住宅（1767（明和4）年現在地に移築）に見られるように、北陸地方の民家では入母屋造の屋根部分を急な勾配で屋根を組んでいる。その技術は五箇山の合掌屋根と同系統であることから、その技法を養蚕生産の空間と保温性確保のために再現したことで合掌造りに発展したのではないかと推定されている。

建築部材の調査によって、18世紀の初頭に五箇山の庄川本流筋（相倉、菅沼集落などがある一帯）に合掌造りが造られ、18世紀中期に白川村、19世紀初期に利賀へと広がったことが分かっている。そして、その地域周辺の建築様式や間取りを取り入れながら、養蚕の最盛期となった明治期に多数の合掌造りの家屋が建設されていった。

つまり、五箇山の合掌造りは浄土真宗の「道場建築」を母体とし、そこに江戸時代の養蚕の普及により、北陸地方に存在していた屋根の技術を応用して機能的な合掌屋根が組み合わさることで成立したのである。

受け継がれる合掌造り

茅葺屋根は定期的な維持管理と葺き替えに専門的な技術が必要であるため、合掌造りは主産業であった養蚕が衰退すると次第に板葺きへの交換や取り壊されるようになり、昭和以降に庄川流域でダムなどの電源開発が行われたことでその数を減らしていった。一方でその特徴的な建築様式は日本国内外で注目、評価された。戦後は積極的な保存活動が行われ、外観のみの保存ではなく、実際に居住用や店舗として活用されているところに五箇山の特徴がある。合掌造りの家屋は産業や暮らし方は変わろうとも、住民や地域の方々の努力によって守り継がれ、その生活とともに生き続けていくことだろう。

＜取材協力、資料提供＞
1）石川県立歴史博物館
2）菅沼世界遺産保存組合
3）高岡市教育委員会文化財保護活用課
4）川崎市立日本民家園

＜参考資料＞
1）「五箇山研究ノート」米沢 康　1962　越飛文化研究会
2）「越中五箇山平村史 上下巻」　1983, 1985　平村
3）「日本の民家」今和 次郎　1989　岩波書店
4）「北陸の住まい 日本列島民家の旅7 中部Ⅱ」日塔 和彦　1996　INAX出版
5）「富山民俗の位相」佐伯 安一　2002　桂書房
6）「合掌造り民家成立史考」佐伯 安一　2009　桂書房
7）「《新版県史》16.富山県の歴史」久保尚文・市川文彦・本郷真紹・深井甚三　2010　山川出版社
8）「五箇山の塩硝史 -最高品質・最高生産量・最長期生産」板垣 英治　2011　日本風俗史学会誌2011.2
9）「日本民家園叢書13 合掌造りはいつ建てられたのか-炭素14による民家年代調査-」中尾 七重・坂本 稔　2017　川崎市立日本民家園
10）「菅沼合掌造り集落　五箇山民俗館　煙硝の館」菅沼世界遺産保存組合

＜図・写真提供＞
P10上写真　松田明浩
写真1、2、3、図1　服部晃大
図2　参考資料10）を基に加筆
図3　参考資料9）を基に作成、加筆